

# 二〇二四年度 特待生入学試験問題

## 国語

### 注 意

- 1 監督者の「始め」の合図があるまでは、開いてはいけません。
- 2 試験時間は、板書されている時間割のとおりです。
- 3 問題用紙とは別に、解答用紙が一枚あります。
- 4 監督者の「始め」の合図があつたら、すぐに受験番号と氏名を解答用紙の決められた欄に書きなさい。
- 5 答えは、必ず解答用紙の決められた欄に書き入れなさい。また、特に指示のあるもののほかは、各問いのうちから最も適切なものをそれぞれ一つ選んで、その数字・記号を解答欄に書き入れなさい。
- 6 試験中に質問があれば、手を挙げて監督者に聞きなさい。
- 7 監督者の「やめ」の合図があつたらすぐやめて、鉛筆をおきなさい。

「一」次の文章を読んで、後の間に答えよ。ただし、字数の指定がある間については句読点や記号も字数に含める。

だれだって「橋」といえば、①大水が来ても流されない頑丈な橋がいいと考えます。それなのに、京都にある上津屋橋という橋は、大水が来て川の水がいっぱいになると、必ず流されてしまいます。もちろん、流されるたびに修理をするのですが、それでも大水が来れば、また流されるのです。ですから付近の人々は、この橋のことを「流れ橋」と呼んでいます。

I、この「流れ橋」は、どうして流されないような頑丈な造りにしないのでしょうか。

「流れ橋」は、京都の南を流れる木津川に架けられた、長さ三五メートルという、とても長い木造の橋です。木津川のaミナモトは、奈良県と三重県に広がる奥深いbサンガク地帯です。II、大雨が降ればたくさん水を集め、ふだんは静かに流れている木津川もたちまち「暴れ川」となります。

「流れ橋」のある所は、地名を上津屋といい、ちょうど木津川を境にして、東側が久御山町、西側が八幡市です。八幡市には、一〇〇年ぐらい前に建てられた有名な石清水八幡宮があります。東の方からcサンバイに来る人は、どうしても木津川を渡らなくてはなりません。この場所に「流れ橋」が架けられたのは、昭和二十六年（一九五一年）だといいます。それまでは、舟で渡っていたということでした。

木津川のこの付近は人家も少なく、広い川原にはアシなどが茂り、昔ながらの光景が残っている所です。そんな光景の中に「流れ橋」が一つ、何十もの太い木の橋脚に支えられ、まっすぐ木津川を横切っています。

現在の橋は、普通、鋼鉄や鉄筋コンクリートで造られています。ただ、「流れ橋」は路面にdきつめられている橋板も、それを支えている橋げたや橋脚も、皆、木で造られています。ただ、東側の十七本の橋脚だけは、川の本流の中にあるため、鉄筋コンクリート製になっています。

「流れ橋」の橋板は、橋げたの上に打ち付けてありますが、おもしろいことに、その両側には鉄の環が打ちこんであって、それに太い鉄のロープが通してあります。その鉄のロープは、たどっていくと途中で橋の裏側に回り、橋脚に固く巻きつけてあります。

橋の下から見ると、太い橋げたは橋脚の上に載せてあるだけです。普通の木造の橋の場合、橋げたと橋脚とは、(注1)かすがいや(注2)ほそなどで、互いに離れないように固く留めてしまいます。ところが、「流れ橋」の場合は、橋げたはその重みで載せてあるだけです。川の水が増えてきて橋げたのところまできたら、木の橋げたは水にぽっかり浮いて、流されてしまいます。

そのまま流されていってしまつたら大変です。そこで、鉄のロープの一部は橋脚にがっしりと巻きつけてあるわけです。もちろん、三五メートルもの長い橋の、橋板と橋げたの全体を一本の鉄のロープでつなぎ留めておくのは無理なことですから、四十メートルから五十メートルでくぎり、八つに分けてあります。

大水で水かさが橋げたまで届くようになると、つながれた橋板と橋げたが、流れに沿って川の中に八つ、縦に並んで浮くことになります。水が引いて川がもとの静かな姿にもどつたら、②それを引っぱり上げ、壊れた部分は修理して、もとのように橋脚の上に載せればいいわけです。

「流れ橋」をeカンリしている京都府の田辺土木事務所の記録によりますと、昭和二十六年に「流れ橋」が造られて以来、台風や集中豪雨で、すでに十回も流されています。

台風で恐ろしいのは、強い風はもちろんですが、fセマい地域に、短時間でたくさん雨が降ることです。梅雨の時の集中豪雨もそうです。こうした大雨で川の水が急に増えれば、洪水が起ります。洪水にならないようにするには、増えた水の分だけ、どんどん海に流れてくれればいいわけです。

このことだけを考えてみれば、川の流れの幅が十分に広く、そして流れの途中にじゃまするものがなければ、水はよく流れ、gテイボウから水があふれ出すこともなくなります。しかし、私たち人間は、生活の必要から活動する範囲を広げ、便利にするために、川には橋を架けました。幅の広い川では、つり橋は別ですが、途中に幾つもの橋脚を立てなくては、橋げたを渡すことはできません。

「流れ橋」は三五メートルもの長い木の橋ですから、橋脚は七十三基あります。橋脚と橋脚の間は五メートルくらいです。もし、橋げたが流されないとしたら、川の中に幅約五メートルの「門」が七十四個、横一列に並んでいるのと同じことになります。これは、水の流れをじゃまする大きなhシヨウガイブツとなります。じゃまする度合いは、水の流れが速くなるほど大きくなります。Ⅲ大水のときは、上流から大きな石ころや樹木など、いろいろなものがたくさん流れてきます。それらが、「流れ橋」の、橋げたと橋脚とでできるAに引っかかれば、流れ口をふさいでしまい、ちやうどそこがせきになってしまいます。そうなると大変です。水かさは急に増加し、テイボウを越えてあふれ出すことになります。

そこで、いざというときに川の流れをじゃましないようにするため、橋げたが橋脚からはずれるような構造の橋にしたのです。

昭和二十六年ごろは、戦争が終わってまだまもないころでしたから、木材を手に入れることがiコンナンな時代でした。橋板と橋げたを鉄のロープでつないでおけば、流されてなくなってしまうことはありません。「流れ橋」は、木材をjセツヤクするうえからも

工夫された橋でした。

「流れ橋」は、今の鋼鉄や鉄筋コンクリートの橋とは違って、自然の猛威に立ち向かってこらえるのではなく、③流されながら、自然の猛威が収まるまで我慢している橋なのです。この「流れ橋」の姿には、私たち人間が B とどのようにつき合ったらよいか、一つの考え方が示されているのではないのでしょうか。

(大竹三郎『流れ橋』より)

(注1) かすがい……材木などをつなぎ留めるための、コの字型の金物。

(注2) ほぞ……材木を接合するとき、片方の材の端に作る突起のこと。

問1 二重傍線部 a～j のカタカナを漢字に改めよ。

問2 傍線部①「大水が来ても流されない頑丈な橋」とは具体的にどのような橋を指すか。本文中から十三字で抜き出して答えよ。

問3 I、II、III に、入る語として最も適当なものを、それぞれ次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア ですから イ しかし ウ まして エ ところで

問4 A にあてはまる語を本文中から三字で抜き出して答えよ。

問5 傍線部②「それ」が指す内容を本文中から十一字で抜き出して答えよ。

問6 傍線部③「流されながら、自然の猛威が収まるまで我慢している橋なのです」に用いられている表現技法として最も適当なものを一つ選び、記号で答えよ。

ア 体言止め イ 擬人法 ウ 反復法 エ 倒置法

問7 B にあてはまる語を本文中から二字で抜き出して答えよ。

問8 この文章の内容と合致するものを一つ選び、記号で答えよ。

ア 京都にある木津川にかかる上津屋橋は、すべて木で造られた橋である。

イ 金属類が入手しづらい戦後には、鋼鉄や鉄筋コンクリートの代わりに木造の橋が増加した。

ウ 川の流れの幅が十分に広い川であれば、橋が架けられても洪水が起ることはない。

エ 「流れ橋」の橋げたは、その重みで橋脚に載せてあるだけなので、川の流れをじゃましない。

〔二〕次の文章を読んで、後の間に答えよ。ただし、字数に指定がある間については句読点や記号も字数に含める。

生物としてのヒトの第一のaトクチョウは二足歩行だと言われる。

I 実は、二本足で立っていたら移動はできないのだ。クマ

やトラなど四本足の動物の歩行を観察すればよくわかるが、四本柱で立っていたらこの上なく安定していて移動は不可能である。前足二本のうち一本に体重をかけ、あとの一本が肩からぶら下がってはじめて自由になって前へ振り出すことができるようになる。人間の足も同じことで、安定を崩さなくては前進はできぬ。つまりヒトは一本足で立つ動物なのである。重さは常に一本の足にかかり、一方の足が腰からぶら下がり、それが振り出され、着地すると、そこへ体重が移ってゆく。

A

①これを、ヒトの歩き方の基本型だとすると、これは日本国内ではめつたに見ることができない。私が見たこの型のもっとも美しい歩きはインドの人たちのそれであった。ガンガー河中流の釈迦成道の地ブツダガヤあたりの農村では亭々たる巨木が並木を作る街道を、いったい何キロメートルを歩いてくるのか、人々がゆったりしたりリズムで、とぎれもなく続いてくるのだが、その一人一人が実にみごとに美しい。これについて私は別に書いたのだが、浅黒い肌に柄物のワイシャツに細身のズボンの男たちは、まるで杉の若木のようにまっすぐ上に伸びている。スタニスラフスキーは『bハイユウ修業』の第二部で歩き方について書き、一日中広場で観察して、十二、三歳ごろの少女の歩き方を見つけ、これこそ②理想だと喜ぶエピソードをcシルしているが、なるほど③これなのか、と私は目を見張った。実のところ、初めてこれを読んだまだ二十歳代の私は街やら学校やらで、dアコガれも手伝って、e随分見て廻ったものだが、さっぱりナツトクのいく歩きにA なかった記憶がある。イ

これに比べると日本人の歩き方はまるで違う。インドの、そしてヨーロッパやアフリカの人々の場合、足とえば、腰から下全部が一つに連なって動く。II 足とは腰から下全部で、その上にちよこんと胴が乗っている。ところが日本人はやや膝を曲げ腰を落

として、fコ関節から下だけを交互に前へ振り出して歩く。こちらの足は長い胴体の下についてたちようどアヒルの水かきと同じ形である。これはB に狩猟民族と水田耕作民族の身の支え方の違いであろう。前者において生活の基本はけものを追って走ることであり、歩くとはいわばゆっくり走ることに他ならないのに、後者においては、重いものを支えて泥沼を、腰を水平に保ちつつ足をひきぬき歩くことが基本になると、しよう。すれば、走るといふ動作は生活に必要な。III 日本の武術には基本的に「走る」とは異なる。忍者の動作に見られるように、「走る」とはただ、速く歩くことに他ならない。ウ

宮本武蔵の『五輪書』には、かかるとに重さをかけ、爪先は軽く浮かす、と教えてある。すぐ気づくようにこれは能の足の運びの基

本と全く同じである。からだは低く沈み、すり足で動き、足跡は二本の線の上を辿るこの形と、インドの人々の爪先で地を蹴って前進する姿とは、ヒトの歩き方の二典型と言ってよいであろうか。(中略)

中井正一の『美学入門』風に言えば、日本人の足はギリシャの神殿の柱の(注1)エンタシスのようにC形であり、インドやヨーロッパの人々のそれはゴシック gケンチクの如くD、ということになるうか。Eの近代劇のハイユウにとって、いかなる腰の保ち方によって、舞台に美しく安定した、しかも「生きた足」を生み出せるか、は容易なことではない。私の目には、タルコフスキーの映画『サクリファイイス』の中で初老の主人公がカメラに向かってまっすぐに歩み寄り歩み去る足の美しさと、もう一方、能のシテの白足袋の運びの冴えとが二重映しになる。エ

日本の武術はもちろんh裸足が④原則である。履くとしてもi足袋か、IV足半(あしなか。かかとの部分はない草履)である。裸足の足の裏の感覚がひたと大地をとらえ、大地に応え、はずむこと。そのためには足の裏と足の指全部でしかと土をつかむことが、まずはjヒツスのことになる。土をつかみ、放し、土に寄りそい、つき返され、爪先が吸い寄せられかかどが拮抗しい、一刻ごとに受け応えがはずむ時、土と生きている足の裏の対話は、V全身にひろがって踊りとまでなるのである。

(竹内敏晴『思想する「からだ」』より)

(注1) エンタシス……柱のほぼ中央につけたふくらみ。

問1 二重傍線部 a↪j のカタカナは漢字に直し、漢字はその読みを答えよ。

問2 本文からは、「これが歩くと言うことだ。」という一文が抜き出されている。この一文を挿入するのに最も適当な箇所を、空欄

ア から一つ選び、記号で答えよ。

問3 I V に入る語として最も適当なものを、それぞれ次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア あるいは イ つまり ウ やがて エ だが オ だから

問4 傍線部①「これを、ヒトの歩き方の基本型だとすると、これは日本国内ではめつたに見ることができない。」について

- (1) 「ヒトの歩き方の基本型」について説明している一文を本文中から探し、始めと終わりの五字を書け。
- (2) 「これは日本国内ではめつたに見ることができない」とあるが、なぜか。解答欄の「から」に続くように本文中から三十八字で抜き出し、始めと終わりの五字を書け。

問 5 傍線部②「理想」、④「原則」の対義語を漢字で答えよ。

問 6 傍線部③「これ」とは何を指しているか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア インドのブツダガヤあたりの農村で見た人々の歩き方
- イ 十二、三歳ごろの少女の歩き方

- ウ 浅黒い肌にガラ物のワイシャツに細身のズボンの男たち
- エ 腰から下全部が一つに連なって動く足

問 7 Aを補うのに最も適当な表現を次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 頭が上から イ 首が回ら ウ お目にかから エ 膝を折ら

問 8 Bを補うのに最も適当な表現を次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 本質的 イ 蓋然的 ウ 抽象的 エ 発展的

問 9 C、D、Eにあてはまる文や語の組み合わせとして最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア C…天に向かって伸び上がるうとしている D…運命の重さを支え耐える E…西洋
- イ C…天に向かって伸び上がるうとしている D…運命の重さを支え耐える E…日本

- ウ C…運命の重さを支え耐える D…天に向かって伸び上がるうとしている E…西洋
- エ C…運命の重さを支え耐える D…天に向かって伸び上がるうとしている E…日本

問 10 次のうち、日本人の歩き方について説明したものとして適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 一方の足が腰からぶら下がり、振り出され着地する。 イ 爪先で地を蹴って前進する。
- ウ 腰から下全部が一つに連なって動く。 エ かかとに重さをかけ、爪先は軽く浮かす。

問 11 この文章の内容と合致するものを一つ選び、記号で答えよ。

- ア ヒトは四足歩行の動物とは違い、二本足で立って移動することができる。

- イ 宮本武蔵の『五輪書』には、能のシテの足の運びについて記述されている。

- ウ 水田耕作民族にとって、走るという動作は速く歩くことと同一である。

- エ インドの十二、三歳ごろの少女の歩き方が筆者にとっての理想の歩き方である。

